

社会的事象と保健福祉問題

柴原 君江

要 旨

一昨年、東北地方の冷害・凶作で外国から米の緊急輸入がされたことは、まだ記憶に新しい。東北地方は実に冷害・凶作、飢饉の繰り返しの歴史であった。当時の庶民の生活や飢饉への対処、弱者への救済の歴史について秋田県を中心に調べ、そこから現代の課題を明らかにしたいと考えた。

救済は、庶民の要求運動と民間篤志家による救済から始る。公的援助はあとからついてくるのが実態であった。

秋田における救済活動の特徴は、「感恩講」に代表される。救済方法は、その後の公的扶助に通じるものがあり、当時の公的救済よりも人間的扱いを受けたと言われている。また、事業の存続、発展に影響を与えたものは、福祉法人的性格を有し、組織、規則が完全であったことで、このことは注目される。

キーワード：地域福祉史、秋田県、飢饉、救恤、感恩講

はじめに

江戸時代後期はまだ生命表が発表されてない時代であるが、寺の過去帳に享年が記録されており、ある村落の平均死亡年齢が算出されている。それによると男28.7歳、女28.6歳という異常な低さで、そのうち乳幼児の死亡が全死亡の70～75%を占めていた。

乳幼児死亡率の異常な高さの原因は、小児病といわれる虚弱、疫病（感染症）や飢饉であった。¹⁾

江戸後期は天候不順による大飢饉によって多くの餓死者が出たという記録がある。飢饉には疫病がついてまわり、多くの幼い命が絶たれた結果が平均寿命年齢の低さの原因となっている。

現在の乳幼児死亡率は世界に比類のないほど改善され平均寿命も延びたわが国にとって、たった200年前がこのような状況であったとは思ってもよらない。また、飢饉とはどういう状況であったのか、豊かな生活を享受している現代にあっては知る由もない。

飢饉による農民の生活については様々な記録があり、餓死者の供養塔や無縁墓、地藏尊などを各地にみることができる。特に寒冷による飢饉のくりかえしによって犠牲を払ってきた東北の米作り地域の悲

惨な歴史と、厳しい自然に対応しながら生き続ける農民の生きざまの力強さ。飢饉への対処や幼弱な子どもへの対策がどのような状況のもとで展開されたのであろうか。

本稿においては分析の対象を秋田県におき、米作り農業県の近代化への民衆の苦悩、東北の風土のなかで厳しい自然に対応しながら生き続ける民衆の生きざま、その歴史の上に立って今なお食料基地として位置づけられている秋田の経済・文化をささえる県民の地域に生きる姿勢に焦点をあてた。社会の底辺に生きた人々の生活実態、冷害と凶作、飢饉と疫病のくりかえしとの戦いの歴史。そこからどのような援助活動が生まれてきたのかをテーマとしてみていきたい。

秋田県には社会福祉史や社会時報、県史など豊富な資料が存在し、社会的問題が庶民、特に女性や乳幼児にどのように影響を及ぼし、その対策がどのように展開されていったかを調べる事が可能であると思われた。また社会福祉史研究の資料も多く、特に感恩講を中心として大友信勝²⁾ 藤嶋正行³⁾ の詳細な研究がある。今回、秋田県立図書館に保存されている数多くの資料から、江戸時代から昭和初期に至るまでの情報を得て考察した。

1. 秋田の風土

1) 気象

山美しい秋田県は、東北地方の北西部に位置し、西側は日本海に面している。東を限るのが奥羽山脈で東北地方を東西に二分している。寒冷な北西季節風の影響を受けるため、冬は月平均20日以上以降雪をみるほどの積雪地帯である。辺境、雪国で地理的にみて恵まれた環境ではない。特に徳川時代は全般に寒冷化の傾向で、冷害、洪水、台風等の異常気象のくりかえしであった。洪水と天候不順による凶作、不作、大飢饉の頻発で稲作農民の苦しみは想像もできないほど悲惨であった。このような異常天候による災害は、数年連続して発生するか継続的にその年に集中する、いわゆる群発生の傾向があった。

異常気象の原因は、

- (1)太陽活動の消長、すなわち太陽黒点の大小
- (2)北太平洋の海水温との関連
- (3)火山爆発による影響、活動などがあげられている。

太陽活動は11年～12年の周期を持っている。太陽活動と降水量の変動から二重周期として35年～50年の周期がある。太陽活動と気候の長期変動から、80年～90年の周期で寒冷化の傾向があるなどの学説がある。

2) 秋田の天災、飢饉の記録

秋田では、慶長7年（1602）から元禄13年（1700）までの100年間に40回の飢饉凶作、不作、洪水大風があったとされている。実に2～3年に1回は災害を被ったことになる。

慶長・元和年間の飢饉によって農民は馬を売り、さらに田畑も手放すといった苦しい状況であった。寛永20年（1643）、幕府から「一般土民仕置」という生活規制が出され、「百姓は布木綿のみ着ること、

常に雑穀を用い、米を妄りに食わざるよう申し聞かすべき事」などの内容と、田畑は永代売買してはならないという禁止令が出された。さらに農民の衣食住などの生活、農耕管理にいたるまで干渉して、年貢の徴収を確実にするための農民統制を行っている。

寛永期の冷害から25年たった寛文7年（1667）から9年にかけて、東北地方全般にわたって寒冷天候による不作が続いた。春は大干ばつで「6、7月の寒冷冬の如し」と記録され稲作期間の後半から低温によって冷害となり、干ばつと競合して病害虫による災害もあった。翌、寛文10年には大洪水による水害で、秋田藩の知行高の六分の一を失う大被害であった。

元禄8年（1695）の凶作による飢饉の状況を、長崎七左衛門は「老農置土産添日記」に次のように記録している。⁴⁾

「さて元禄の飢饉にハ、春より東風折々吹、夏中寒く稲ハ出ぬ勝にて、畑作実入らず。多分藁（かや）、蕎麦（そば）からを食事とし、或ハ稻かぶの根を洗ひ、それを臼にてつき蕨根（わらびね）をたるるやうにして、その塵（はな）を食し、終にこれも食ヒ尽し、後にハ萱家の屋中を結いし縄などを食しとぞ聞伝しか....」

こうした災害、冷害にいかに対処するかは、農民にとって大きな問題であった。近世中期以降、村に住む老農層や勸業行政家たちの手になる農書の多くも、つねに凶作を念頭におきいかにして安定した米作り技術を確立し、凶作を克服するかに多くのページを割いているのである。

2. 民衆の生活様態（江戸期から明治、大正、昭和初期）

1) 江戸期の農民の生活

秋田は農業県であり、主たる産業もなかった。物質的にも恵まれず地理的にみても辺境・雪国であり、気象条件の悪さが農民を苦しめてきた歴史がある。

秋田藩は20万4千石、実高40万石といわれているが、凶作のくりかえしで、人口40万のうちいどきに10万人もの餓死者をだしたとの記録がある。農民

82%、武士7.7%、町人6%で消費階級の武士が多く、しかも禄高者が増えて逆三角形をとり、この条件からますます生活は厳しくなっていた。藩士の生活も決して豊かではなく「知行の3分の1借り上げ令」などで収入は落ち込み、生産者の農民も支配者の武士も生活の開きはなくなるというのが現実であった。⁵⁾ その生活の実態と凶作に対して農民がどう対処したか見ていきたい。

生活の実態：

江戸中期、角館給人、蓮沼七左衛門景知は知行高79石、実収は25石という窮状であった（現代に換算して年収125万程度）。その生活は、「財用に心を尽くし一家を治る」と儉約主義で貫かれている。「すべて紙屑は捨てず、障子の古屑も集めておいて半切紙に漉して使え。使用人の歳暮は50文（500円程度）、野郎に25文」などの生活記録が残されている。⁶⁾

老農として知られている石川理紀之助は著書「適産調将来の心得」に江戸時代の農民の姿を記録している。「……農民には苗字がなく、役人などと話すにはシキイの外であって、もし気に入らなければ武士である役人は平民を手打ちにしてもさしつかえないのであった。」年貢の米を収めるときのようについて、「米がよくできていないとか、調整がわるいとかいろいろなナンクセをつけ、その米をはかるときの惨酷さ、かれらがはかると、手品のようにかならず米が足りなくなっており、こちらは三斗なら三斗の米をまちがいなく多いくらいにはかって来ても、不足だから受けとられぬというので、仕方なくあやまって許してもらおうとしてもききいれてくれない」「昔の百姓の口に入れるものはカテであって、粟、稗、大根、蕎麦、カサの葉……」⁷⁾という状況であった。

当時の税制度は、原則として「六ッ成り」といって六公四民の割合。知行地を持つ武士や高持百姓も5〜6割の税率だった。例えば、農民は米10石のうち6石を物成（正租）として納め、小物成としてもち米や小豆、大豆、ゴマ油を納める。これらは物成から差し引かれる。ほかに付加税として諸役、藁13束、糠1石5斗、薪1かま、萱千把、雪かき人足4人、春搔き人足3人、馬3頭、その他雑税として口米や五斗米など領民の福祉のための費用として取り立てる税もあった。

凶作：

税制度だけでなく、相次ぐ冷害、風水害、凶作、飢饉は農民を苦しめた。天保4年（1833）の凶作の悲痛な状況は史上最大の飢饉といわれ、晩秋から翌春にかけて餓死者が続出、それに加えて疫病の流行が被害を大きくし、まるで地獄絵図といわれた。当時の記録が「栄郷土誌」に残されている。

「……諸方の道路に死人が絶えず、施行米を拝領しようと集る者、並びに乞食風の者は親は子を捨て、子は親を見放し、夫婦離散

も愁いとせず、まったく信義を取失い、ただお互いが生きのびようとするのみで、さながら餓鬼道というべきか、あるいは修羅道というべきか、筆舌に尽し難い有様であった」

農民一揆：

天保3年（1832）の凶作で翌年大飢饉を迎える。米の小売値が高くなり、県北方面ですでに騒動が起きていた。天保4年秋田藩の玄関口である土崎湊に米騒動が起こり、これをきっかけに秋田藩全体に農民一揆が起った。天保5年（1834）1月、仙北郡前北浦（角館以南）で40以上の村の農民2000人が城下をめざして押し寄せた。これは秋田藩が前年の凶作に対処するため配給制度を実施する方針で、仙北地方の保有米を調査したことと、阿仁銅山4000人の幕府からの飯米調達を引き受けたことへの抗議であった。この一揆に首謀者が誰か判らないように円形に署名した傘型連判状が残っていることは有名である。

この一揆のもつ意義について「秋田県史 近世編下」に次のように記されている。

「天保の前北浦、奥北浦一揆は、その規模の大きさといい、藩の日常的な基本政策へ真向から反抗するその高い政治性といい、まさに秋田藩はじまって以来の一大一揆であった。しかもそれが単に一地域の孤立したものとしてではなく、城下の“うちこわし”と結びついて全藩的な反封建運動の様相を示し、深刻な藩制の危機を招くに至った」

2) 明治～昭和初期の庶民の生活

慶応3年大政奉還、王政復古の令が下され明治となったが、秋田藩は「戊辰の役」に巻き込まれる。明治4年廃藩置県、武士階級は解体した。人口431,898人、戸数76,972戸であった。太政官布告で穢多（えた）・非人の呼称を廃止し、姓の呼称がゆるされた。しかし、庶民の生活は相変わらず貧しく、子女など社会的弱者に対する受難の歴史があった。

貧しい農民：

徳川300年の封建社会から解放され、西欧文明を取り入れながら近代化を進めていった時期であるが、農業県である秋田の場合は近代化への歩みはのろく、デフレ財政の余波で生活の苦しい農民が田畑を手放した。その結果、地主の台頭とともに小作人が急増し、北海道への移住や出稼ぎ者を生む一因と

なる。自然条件に恵まれない秋田県は、冷害、凶作の発生はめづらしくなく、一般に生活水準が低かった。

農民は明治以降、農奴の境遇から解放されることはできた。しかし、所有する権利、私有財産が認められる時代になって、地主も不在地主も財産を蓄えて田畑を耕す農民より上の階級の人間と考えるようになった。耕作する農民から小作米を搾取してしぼられる農民は新しい農奴となり、そして地主は働かず金を蓄える不労所得階級となった。

農民は明治末期からの経済恐慌にさいなまれ、さらに凶作が重なったため、その生活はどん底に陥った。自作農の中にも田畑を手放して小作農に転落するものが続出した。恐慌に対して、どのような対策が行われたかについては際立った記録は見当たらない。国も県もかなり疲弊していて、独自の施策を打ち出す力が乏しかったのではないかな。ただ、「天候不順で43万石減収の凶作、これを救済するため産業組合設立をすすめる」とあるに過ぎない。⁸⁾

結局、県当局は副業の奨励、家畜奨励、耕地整理の推進、産業組合設立の奨励など掛け声だけで大きな救済策はとれなかった。しかし、翌大正3年、第一次世界大戦の勃発でわが国にも好景気がおとづれ、これが農村にも影響し、農産物や米の値段が高騰した。米価は4年前に比べて4倍になったとはいえ大多数の小作農民には恩恵が乏しかった。むしろ諸物価高騰にさいなまれたのが実情である。

乳幼児の問題：

墮胎、間引きは徳川封建社会前期よりみられた風習と言われ、東北地方に多かった。それが社会的問題になったのは徳川後期で、人口の減少、停滞により農民層からの年貢収納高が減少傾向になったからである。

乳幼児の死亡率が高かったのは、母の過労、妊娠中の栄養不良、育児知識の欠如、貧困などが原因であろう。また、医療にも縁遠く、出産に立ち会う産婆の多くは経験と勘に頼るいわゆるとりあげ婆さんで医学的知識や技術にも乏しかった。難産のときは加持祈禱にすがり、命を落とす若い母も少なくなかった。子供が生れても3週間ぐらいいは名前をつけず、生存の見込みがあると役場へ出生届を出した。

乳幼児の死因は通称「ムシ」といわれる小児病であった。どのような病気かわからないが体質虚弱あるいは栄養状態が悪いため消化不良や自家中毒

症、脚気、小児結核などではなく命を落としたのであろう。その他疱瘡、疫痢、腸チフスなどの急性伝染病であった。

明治5年、学制施行。しかし、貧困や無知のため就学せずまた、学齢期を終えないうちに奉公や子守に出されることも少なくなかった。

明治新政府になって人身売買は禁止された。しかし、農村地帯は墮胎、間引き、捨子があり、乳幼児の死亡も多く、それだけ農民は貧しかった。明治9年2月4日、東京日日新聞の秋田近況の記事である。

「大館あたりの辺びにては貧乏人は活用（生活）の立ちかねる者多く、子どもは3、4人目より以下大かた墮胎し、又は圧殺して溝や谷川へ投棄することは一般の常として惨刻（惨酷）なりとも思わぬ風習なりしが、置県後は大館に市庁（元の郡奉行の役館）を置かれて、この悪風を防がため、月々妊娠の婦女子を取り調べ法を設けて墮胎圧殺を防ぎ、これを養育するの策を施行せられたるは、実に起死回生の法典なり。」

娘の身売り：

売春は全国の問題であり、秋田においても交通の要路や宿場に遊女宿があった。3～4年毎の凶作があった秋田では、貧農ほど子女を年貢奉公の名目で身売りをした。これを親考行として奨める風潮があった。明治以降の酷い凶作は大正2年と昭和9年で、世界的な不況、恐慌と重なって、娘の身売りが続出した。

娘の身売りについては、大友信勝の秋田県を中心にした研究がある。^{9) 10)}

恐慌下において経済的破綻を最も強く受けるのは小作農であり、小作料を納められないと契約を取り上げられ、食べるものもなく、かといって売るものもない。娘の身売りをせざるを得ないのはこのような生活苦からであった。娘の身売りがどの様に行われたか正確な数字の把握は難しいが、農業恐慌による疲弊が重なり凶作の被害が大きかった昭和9年は前年の2倍を越える数で、防止のための対策も全く効果はなかった。¹¹⁾ 昭和7年に実施された救護法も、財政上の理由から救護対象を限定した予算であった。

3. 底辺に生きた人々への救済対策（江戸期から明治、大正、昭和初期）

1) 飢饉への救済対策

庶民の窮乏生活への対策として、備荒施設や民間の救済組織として感恩講がある。子供の健康問題への対策は第1次大戦以降になる。

窮民救済：

幕末の各藩の財政は、窮乏状態にあり、凶作、飢饉が発生しても十分な政策をだすことができなかった。秋田藩においても三代藩主のころから財政状態は深刻となったが、寛延元年（1748）及び宝暦6年（1756）の凶作時に、お救小屋を設けて窮民救済をおこなっている。救いを求めた人は日に1200人と言われている。¹²⁾天明2年（1782）～6年（1786）にかけての凶作時には、酒類の製造禁止、関東、陸奥、出羽、信濃の諸国へ米穀売惜禁止令、他領に輸出するのを禁じた。天保2年（1831）～8年（1837）の凶作時に、藩の穀倉を開き1人1日米3合まで支給したが翌年には空になる状態であった。この間、一人の餓死者も出さぬようにとの通達をして、新潟、富山より救済米の輸入をしている。物価対策として、藩の貯蔵米を放出して領内に分配し、それによって物価高騰を防ぐ専売性を実施した。また、倭約令を出すとともに、凶荒に備えて雑穀などの貯蔵を奨励した。矢島藩では、藩主みずから難民救済にあたり、他藩から金子を借りて米を買い、自他領民を問わず難民を收容して食物を与え、医療を施して救済にあたった。天保4年10月（1833）、秋田、河辺、山本の3郡にお救小屋をもうけ、天保7年10月には向う7カ年間、玄米の貯蔵を命じている。この貯蔵は後に5升備米として郷倉として発展する。¹³⁾

郷倉（ごうぐら）：

古代から農業災害の多いわが国は、さまざまな救済施設があった。屯倉（みやけ）もその1つで古代からみられ、豊作時に穀物を貯蔵して凶作時に不足を補う施設である。その他、義倉、常平倉、不動倉などがあり、穀価の暴騰に際しては倉庫を解放して価格を引き下げ、豊作には穀物を買上げて価格の均衡をたもち人民の安定を図った。自主的な共済施設をつくり、凶荒の予備として一定量を貯蔵する制度を設けたのは近世になってからであると言われている。義倉は民間の福祉運動で、天明3年（1783）領内予備の藩令にこたえてもうけられたもので、万

秋田の各藩においても、封建制度のもとでは自給自足の生活が強いられ、凶作飢饉の時は自藩の力で対処しなければならなかった。相次ぐ飢饉に、士民一体となって凶荒に備える、いわゆる備荒制度が強化され、他の地方に比べて著しく充実していた。この備荒施設を郷倉といい、備荒貯蓄の目的でその郷の農民が共同して穀物を貯えた共有の倉庫のことである。

秋に収穫した新穀を各家平等に、あるいは資産や耕作反別に比例して出し合い、これを貯蔵して一定の時期に食糧の欠乏した農家に貸し付け、わずかな利息を加えて次の年に新穀で返済するというしくみである。郷倉の貯蓄量が増加すると穀物を売却して貯金とし、不時の災害や非常時の救済にあてた。

郷倉は、郷村内の農民の隣保共助の精神を基調とする一種の社会的共済施設ともあるいは経済的共同負担組織ともいえるもので、当時の農村の重要な凶荒救済施設であり、農業災害に対する唯一のなかば恒久的な政策であった。明治維新後、貨幣経済の発達と部落有財産の統整合理などもあって郷倉は次第に処分され廃止されるようになっていくのである。

感恩講：

(1) 感恩講の成立：

文政10年（1827）、秋田藩では、あいつぐ凶作による貧困と嬰兒殺し、間引きがひろがりを見せ藩の対策が必要であった。当時、藩の財政は乏しく、きびしい年貢のとりたてがあったため、うちこわしや農民一揆の可能性もあり、備荒貯蓄が必要であった。藩主佐竹義厚（よしただけ）が窮民救済と嬰兒撫育を考えていることを知った御用商人の那波三郎右衛門祐生（ゆうせい）は、これに賛同して私財150両と10年間の年賦250両をあわせて藩に献上し、事業資金とするよう申し入れた。さらに祐生は同志の献金を募り文政12年（1829）に総額金2000両、銀10貫目を集め、知行高230石を購入しそこから出る知行米によって事業を行った。領民の事は領民でという相互扶助思想を基に、公的機関の救済は最低におさえ主だった救済事業は民間人に行わせるために、補完的事业を実施する民間事業団体組織が必要であった。¹⁵⁾

(2) 感恩講の歩み：

感恩講は、当初久保田町（秋田市）に設立した。

次いで土崎港町、大館田郷、平鹿郡内ノ目村に設けられた。その後、各地に設けられ昭和10年には18を数える。事業展開の中で重要な転機になったことがらについて、大友信勝の論文によると¹⁶⁾、①天保4年の飢餓への救恤によって地域から餓死者を一人も出さなかったこと、秋田藩のひざ元にうちこわし等を起こさせなかったところに社会的意味があるとしている。②廃藩置県によって講の備高は藩のものとなされ官没しているこのことから廃止の岐路にたされたが、年番の協議で存続が決められている。事業継続資金が困難として陳情が繰り返されているが、明治7年と10年に大蔵卿より下賜金が支給されている。③旧藩継続の監督方を解いたことによって、所有権等の勧解をめぐって裁判所に申し立てが行われている。判決は、法人なので人民に所有権はないと講側が勝利している。④貧児救済事業は明治38年より行った。救恤区域内に永住する貧困者の子弟及び保護者のいない6歳から15歳までの子供を收容し、尋常小学校の教科課程と生業のための職業指導を行っている。大正13年からは公立学校に通わせたため、生活訓練と職業指導に重点がおかれた。

(3) 感恩講の事業目的：

一般窮民の救恤（天保4年より実施）と嬰兒育児事業（明治38年児童保育院の設立により実施）

(4) 事業実施体制：

救恤規則をつくって、年番のもとに用掛、下役をおいて実施体制を整え、調査をしたうえで救恤を行っている。年番とは理事にあたる役員で、町の実力者にあたる人を選定している。用掛、下役は貧困家庭の訪問調査や事務的なことを行っていた。救済方法は、貧民の状況を調査し、1カ月以上3カ月を限度として1人1日白米2合6勺、7歳未満は半額を給与、

再度救恤もあった。その他現物給与として、防寒衣類、薪炭、病者には医療や入院療養扶助、職業につきたい者は、生業資金や器具の給与、職業紹介と自活指導、救恤により怠惰となった者は再度救恤しないなど生活指導も行った。

(5) 特徴：

事業は災害や凶作時だけの救恤に止まらず日常的に窮民救恤を展開していた。¹⁷⁾

恤救（じゅつきゅう）規則：

戦前の代表的な救貧政策で、公費によるはじめての救済規定である。

明治7年12月「恤救規則」、明治8年内務省通達「窮民恤救調査手続」の公布によって救済事業を開始した。救済数は秋田県史によると表1の通りで5年毎の救済数を示している。¹⁸⁾

2) 児童への対策

児童保育政策：

元禄時代に堕胎・間引きを防止し、乳幼児を救済するため「赤子養育仕法」がだされた。堕胎、間引き、捨子を禁止したといっても、乞食になったり、犯罪に加担する子どももあり、児童福祉の水準は低かった。明治新政府になって児童保護対策に努めたがなかなか成果があがらず明治10年頃から民間篤志家による児童保護救済事業が全国的に行われたのみであった。感恩講は貧民救済事業に追われ児童まで手がのびなかったが、明治38年になって児童教育施設として児童保育院を設立した。講自体は財政的困難もあったが、役員の努力と国、県の援助によって貧困児童を收容し教育と勤労精神を養い、社会で自活できる素地を培う事に重点をおいて保育をした。

明治30年代から大正初期における相次ぐ凶作と世

表1 恤救規則による救済数

年次	前年より 繰越人員	本年 救済人員	合計	死亡	廃体	年末現在	廃失	疾病	幼弱	救助金
明治 20 年	37 人	1	38	1	3	34	16	3	10	188 円
25 年	49	4	53	6	7	40	15	11	9	399
30 年	54	8	62	7	—	55	17	18	14	413
35 年	511	33	544	15	169	360	56	55	181	967
40 年	298	40	338	22	39	277	37	142	44	652
44 年	83	—	83	7	5	71	13	40	11	414

界的な経済恐慌に、零細小作農民は米飯にもこと欠き、小学校では弁当も持参できない子や長期欠席児童が目立った。県の呼び掛けで民間有志や地主層が救済に乗り出し、全国から義援金が送られてきた。しかし、学校を退学し働き手として一家を支えた児童も少なくなかった。「今のような民生委員、赤い羽募金が仮にあったとしても、肝心の福祉行政が全く未成熟だったはずだからとても貧農の救済までは手が延びなかったと思う」¹⁹⁾とある農家の年寄りが当時の事を語った記録が残っている。

貧困児童への保健活動：

一般庶民の生活は極度に貧しく、衛生状態も悪かったため乳幼児の伝染病が蔓延した。治療も民間療法や俗信の域を出なかった。例えば伝染病に感染しないようにニンニクを入れた袋を子どもの腰に下げさせたり、疱瘡（天然痘）がはやると村境にしめ縄を張って「ハウソ神」を入れないようにした。不幸にして感染した子どもには、枕元に赤い幣を立てたサンダワラをおいてお赤飯をそなえ、ハウソ神を祭って病気が軽く済むように祈る風習があった。天然痘の罹患は避けられないものとされ種痘もなかなか普及しなかった。麻疹や百日咳などと共にいちどは通る関門として、ひたすら神仏に祈り自然治癒を待

4. まとめ

一昨年、東北地方の冷害・凶作で、外国から米の緊急輸入がされたことはまだ記憶に新しいところである。わが国では凶作に無関心でいられるほど豊かな食生活を享受しているが、当時テレビに写し出される農家の方たちの苦労が再度思い出された。

秋田は実に冷害・凶作、飢餓の繰り返しの歴史であった。その時々の方々の生活や飢饉への対処の記録がさまざまな形で残されている。それらを通して庶民救済のあゆみを、農民の生活や社会的弱者を中心に近世から昭和初期に至るまでを追ってみた。

地理的に恵まれない環境におかれ、生産者である農民より消費階級の武士、高禄者が多く小作人より搾取する大地主が多い条件の中にあっても、農民はたくましく生きる形をとっていった。儉約に徹した生活をしながらも強訴やうちこわし、農民一揆によって救助を願っている。貧しい生活の犠牲になるのは常に女性と子どもであって、堕胎、間引き、娘の

つだけであった。

明治3年、種痘実施の太政官布告を発したが、なかなか普及しないため県の告諭で「種痘は小児が生まれて100日前後が安全で実施によい時期である」と布達をはかっている。²⁰⁾ 告諭は種痘についてその方法や検診について丁寧に指導し、貧困家庭には助成対策もしているが本格的に感染症の予防対策が行われるのは明治30年以降になる。乳幼児死亡率は明治43年に詳しい統計があり、秋田県は出生1000対192とされている。全国的統計では1000対157なので高率県であったといえる。

劣悪な農民の生活改善や、子ども、妊産婦に対する保護事業は昭和10年以降になって開始された。東北6県において「財団法人東北更新会」が発足し保健婦による巡回訪問が行われた。当時は産婆看護婦、社会保健婦などと呼ばれていた。その主な事業は分娩や沐浴など助産婦業務、妊産婦乳児保護、栄養改善指導などであった。

保健衛生の知識の普及や緊急治療など、その活動の成果が注目され県の事業として取上げようとする動きや保健婦の養成も始って、現在の保健婦活動を生み出す基礎となったのである。

身売りなどの悲しい犠牲に対しても禁止令を出す以外に対策が出せなかったのは、社会の構成が逆三角形をとる条件がますます秋田を困窮においやり、弱者にまで救恤が及ばなかったのからであろう。

農民の自立意識が高まり、互いに連携をとって自由を求める要求を表現するようになると、対策がたてられる。篤志家による民間救護が最初の対策で、公的救済はあとからついてくるのが実態であった。

秋田における救済活動の特徴は、感恩講に代表される。社会の変革によって感恩講はいくたびかの転機を迎えたが、今も児童保育院としてその幾つかが存続されていることは、福祉法人的性格を有し、組織、規則が完全であるからといわれている。「個人のレベルのものから公益法人化をはかったということが、事業の存続と発展というところに大変大きな影響を与えている」²¹⁾ ことに注目する必要がある。感恩講の救済方法は、生活、医療、生業扶助などがおこなわれ、その後の公的扶助に通じるものがある。

当時公的救済より感恩講の救済のほうが人間的取扱いをうけたであろうとされていることもまた、現行の福祉制度に照らし合わせて考えるべきであろう。

秋田県の保健、福祉救済史を概観して、福祉制度が拡充される社会的背景には、大友信勝が言われるように「住民の厳しい生活実態とそれを反映した要求運動、さらに生活問題の解決・緩和をはかりながら住民の主体者形成や制度の拡充、創設に一定の役割をはたす社会事業実践が相互に関連性をもって展

開されている」²²⁾ことを理解するべきであろう。

歴史的事実は忘れ去られ、そして知る機会も少ない。いつの時代にもきびしい現実はあるけれど、未来はどうあったらいいか展望するためにも歴史的研究を意義あるものにした。

本研究にあたり、東洋大学、一番ヶ瀬康子教授、大友信勝教授にご指導いただきましたことを感謝します。

引用参考文献

- 1) 立川昭二(昭和51年)「日本人の病歴」P.63 中公新書
- 2) 大友信勝(1978年)「社会事業史研究について—感恩講を中心として—」福祉大学評論23号
- 3) 藤島正行(1976年)「秋田県社会事業史—感恩講史調査を中心として—」秋田近代史研究No.26
- 4) 秋田県農業共済組合連合会編(1978年)「秋田県農業共済史」P.55
- 5) 秋田県社会福祉協議会編(1979年)「秋田県社会福祉史」P.2 秋田県社会福祉協議会
- 6) 前掲書5) P.3
- 7) 今野賢三編(1954年)「秋田県労働運動史」秋田県労働運動史刊行会P.402
- 8) 前掲書5) P.113
- 9) 大友信勝(1980年)「昭和恐慌期における東北農村と娘の身売り—秋田県を中心に—」
- 10) 大友信勝(1980年)「昭和恐慌期における娘の身売り—1930年代の社会事業にかかわった人物を中心に—」
戦前日本社会事業調査資料集 第8巻 勁草書房
- 11) 前掲書8) P.58
- 12) 前掲書3) P.4
- 13) 前掲書3) P.5
- 14) 前掲書4) P.7
- 15) 前掲書3) P.9
- 16) 前掲書2) P.31~P.32
- 17) 前掲書2) P.22
- 18) 「秋田県史第5巻 明治編」P.1189 秋田県
- 19) 前掲書5) P.119
- 20) 前掲書5) P.69
- 21) 地域福祉史研究会編「地域福祉史研究序説」P.403 中央法規
- 22) 前掲書2) P.27
- 23) 田口勝一郎(1987年)「秋田県の百年」河出書房新社
- 24) 秋田近代史研究会編(1974年)「藩政時代の村・羽後における飢饉・一揆」
- 25) 田口勝一郎他(1987年)「図説 秋田県の歴史」河出書房
- 26) 「秋田県社会時報」(1977年) 日本福祉大学社会事業史研究会 同大学生協
- 27) 新野直吉(1982年)「秋田の歴史」秋田魁新報社
- 28) 田口勝一郎(1985年)「近代秋田の地域と民衆」みしま書房
- 29) 新山新太郎(1978年)「農民私史」農山漁村文化協会
- 30) 「秋田県民100年史 1~3」(1986年)無名社出版
- 31) 仲村・佐藤他編集「社会福祉の歴史」14刷(1995年) 有斐閣

A Historical study on Regional welfare

The Problems of Health and welfare Related to social Matters

an abstract

It is fresh in our memory that rice was imported urgently from abroad because of cold-weather damage and poor crops in the Tohoku district in the year before last. Cold-weather damage, poor crops and famine occurred over and over again in the history of the Tohoku district. We wanted to study life of the populace of those days, measures to cope with famine, and histories of relief of the weak laying stress on Akita prefecture and to make problems of the day clear on the basis of that.

Relief begins with requiring movements by the populace and private relief by benevolent persons. It was a reality public assistance followed that.

The feature of relief activities in Akita prefecture is typified by “Kan-on-ko” . It is said that relief ways of it were linked up with subsequent public aid and the populace were treated more humanely by it than by public relief of those days. Things which influenced continuance and development of the project were that it had a character like a welfare corporation and its organization and rules were perfect; that is worth notice.

KEY WORDS

A history of regional welfare, Akita prefecture, famine, relief, Kan-on-ko